



日本キリスト教団
三軒茶屋教会

三軒茶屋 教会通り

〒154-0024
第24号 2005年8月発行 東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL/FAX: (03)3418-4933
発行: 三軒茶屋教会

語り継ぐ絵画



牧師 陣内厚生

今では、かなり有名になった戦没画学生慰霊美術館「無言館」(長野県上田市)をご存知でしょうか。戦地から帰還した画家の野見山暁治氏と、美術館経営者の窪島誠一郎氏とが、ふとしたきっかけから、促されるようにして全国の戦没画学生の遺族を訪ね、遺されていた絵を集め、一堂に展示したものです。

一九九七年開館を知った私は、翌九八年三軒茶屋教会に着任すると、早速ここを訪ねました。「無言館」は信州の山並みを遠景にした小高い山頂に、ヨーロッパの教会か僧院のような雰囲気をもって佇んでおり、上から見ると十字架の形になっています。中に入ると、まるで戦没画学生の鎮魂の礼拝堂とおぼしき空間がそこにありました。

六〇有年前、画家になることを夢見て美校に学び、志半ばで戦争に狩り出され戦死した人たちの遺作の数々は、無言のうちに観る者に語りかけるのです。あの時代、絵描きになるということは、非国民とのそしりを受け、真先に戦場に送られていっ

たことを思うと、戦争の不条理を恨まずにはいられません。彼ら画学生たちの絵と共に、家族に遺した最後の言葉が添えられています。

「あと五分、あと一〇分この絵を描かせてくれ。小生は生きて還らねばなりません。絵を描くために。」
「せめてこの絵具を使い切つてから征きたい。」

「お姉さん。生きて還つたらばくをバリに行かせてくれますか。」
「アトリエはそのままがいい。膠(にかわ)は空き缶に詰めて密封しておいて下さい。」 etc.

今年三月、「無言館の遺された絵画展」が東京で公開された折、これらの絵の前で涙する人たちが多くありました。それはたとえ絵としては未熟ではあっても、純粹な青春の証しであり、迫り来る限られた日々での、精いっぱい抵抗の声のように伝わってくるからです。彼らの数百年の絵は、失われた生命とひきかえに、平和な時代においてこそ絵が描けること、そして何がこれを妨げるのかを訴えているようです。

私は、なぜか「無言館」に惹かれてしまい、三たび上田を訪ねました。六〇年以上も経って、中には傷みの激しい絵、郷里の風景、愛する家族を描いたもの、裸婦や自画像など、また戦地からの絵手紙や遺品もあって、それらは何度観ても優しさに満ちています。美や芸術を究めようとした若者が、絵筆に代えて銃をもつて散つていかねばならない、そんな時代を再び招いてはならないことを痛感させられます。

◆ ◆ ◆
敗戦から六〇年。私たちは、あの太平洋戦争がどのような意味をもっていたのか、責任はだれがとるのかという国民的総括をしていません。旧約の預言者たちが時代を鋭くとらえ、嘆き、執り成し、警告をしてきたように、預言者的思索と言動が求められているのです。それは結局、神の言葉を知っている教会の手にかかっていると言うべきでしょう。

「キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。」(コロサイ三・一五)。